

(資料2)

視覚玩具コーナーの展示内容

展示 A : キノーラ

連続した絵をパラパラとめくって見る「フリップブック」を装置化したもので、絵がほんの一瞬止まり、すぐに次の絵に替わり、その絵がまた一瞬止まるという“間欠運動”で、動画が動いて見えます。

展示 B : ヘリオシネグラフ

盤を回転させて、スリット(細いすき間)から反対側の盤に描かれた絵を覗いて見ます。「フェナキスティスコープ」と同じしくみで、スリットごしに一瞬だけ見える絵が次々と連続して切り替わり、絵が動いて見えます。

展示 C : ソーマトロープ

残像現象の実験器具が後に玩具として売り出されたもので、円板を回すと、その表と裏に描いた絵が交互にすばやく切り替わるため、二つの絵が重なって一つの絵に見えます。

展示 D : プラキシノスコープ

ドラムを回転させると、その内側にある動画が中央の多面鏡の角度によって次々にスクロールするように切り替わって、絵が動いて見えます。他の視覚玩具と比べると、鏡を使っているの、見える像が明るいのが特徴です。

展示 E : 影を捕まえる！

この部屋の壁は、当たった光を吸収して、一定時間溜めておくことができる特殊な素材「蓄光シート」でできています。一瞬ピカッと光るストロボ光で、壁の前に立った来場者の姿が、影として定着されたように見えます。

展示 F : ヤマムラ劇場

ヤマムラアニメーションの作品クリップを上映中です。代表作『頭山』や最新作『年をとった鯉』など、いろいろな作品の見どころが、ぎゅっと詰まっています。

展示 G : キップリング・ライト

実際に作品で使われた町のセットをライティングしてみましょう。光の強弱や方向、色などの変化で、朝・昼・夜の雰囲気を作り出すことができます。

展示 H : 立体ゾートローブ

筒を回転させて、スリット(細いすき間)から中を覗くと、少しずつポーズの違った人形が動いて見えます。スリット越しに一瞬だけ次々と人形が見えるので、残像現象の作用で、あたかも人形がその場で動いているように見えるのです。

展示 I : ストライプシネマ

手前にある細い縞模様の帯を左右に動かしてみると、シルエットの絵が動いて見えます。細く分割して重ねた何枚ものシルエットの動画に、手前の縞模様が重なると、その一枚ずつの動画の形が現われます。それを連続して見ることで動きが感じられるのです。

展示 J : レンチキュラー

何枚もの動画が細く分割されて並べられた画像の表面に、特殊なレンズのシートを重ねてあります。見る角度によって、レンズの作用で特定の動画だけが見えます。角度を少しずつ変えていくと、動画を連続して見ていくことになり、画像が動いて見えるのです。

展示 K : フェナキスティスコープ

日本では「驚き盤」という名前で親しまれた視覚玩具で、絵が描いてある面を鏡に向け、円盤をピュンと回してスリット(細いすき間)から鏡に写った絵を見ます。面に描かれている模様全部が動き出して見えるのが魅力です。

展示 L : カメラオブスキュラ

ラテン語で「暗い部屋」というこの装置から、今の「カメラ」が生まれました。真っ暗な部屋(箱)に開けた一つの小さな穴から光が入り込み、外の景色を倒立像としてスクリーンに映し出します。穴の代わりにレンズを使うと、より多くの光を集めることができ、像も鮮明になります。

展示 M : 「水棲」撮影セット

ガラス板の上に、色粘土を薄く延ばして絵を描き、形を少しずつ変えながらコマ撮り(アニメーション撮影)していきます。絵の裏側から光を当てることで粘土が透き通って見え、粘土の厚みで色の濃淡が表現されます。